

秋の夜の空を仰いて

法學博士 河田 嗣 郎

秋の夜の空を仰げば、誰でも何かの感に打たれる。其の美に驚くものもあるであらう。永遠無窮を感じる者もあるであらう。神秘を憶ひ、神に接する者もあるであらう。上根の人と下根の人とで、感慨は色々であるにしても、何人も全く無關心に秋の空を見ることはあり得ない。そんなにも秋の夜の空は意味深遠である。

私の郷里地方の盆踊りの歌に、“天の星ほど餅食やよいの、富士の山ほど砂糖をつけて”といふのがある。昔、百姓が貧乏で、食べるものも十分でなく、餅など腹一杯食べたこともなかつた時代の、百姓の感情を語つたものとして、面白いし、哀れでもある。

同じく盆踊りの歌に、“天の星様数へて見たら、三十三萬百七ツ”とあるが、“京の三十三間堂の佛の数は、三萬三千三百三十三”といふのと同巧異曲で、ともかく大變な數である。その無數無量の星辰が、一々に世界を爲し、生命を有ち、詩を語り、信仰を啓示するかと思ふと、實に感慨無量である。七夕さまだとか、商人星だとかいふやうに、人格化されたものもあれば、大熊、小熊、蛇など、鳥獸の名を持つものもある。これは、西洋でも、東洋でも同様である。南極の壽星なども好い。

東洋人は、「天の川」といひ、「銀河」と感ずるのに、西洋人は「乳の道」と見る。そこいらは東洋人と西洋人と大分違ふやうである。たゞ見たまゝの感じを其まゝに名づけたのだが、感じ方が違ふ。又、同じく“河”と見るにしても、日本人は單純に“天の川”といひ、支那は“銀河”と形容して見る。此所にも多少の相違がある。銀といふのだから、お金ほしさの餘り、名づけたのではないと謂へるが、やゝ物質的である。ましてや「乳の道」と見るに至つては、牧畜民族の原始感で、面白いけれども、飽まで唯物的である。とかく支那人は、色々の意味に於て、日本人と西洋人との中間に居るやうだ。

月に關しては、あまり迷信的なことを聞かないが、星に關しては色々の迷信があるやうだ。太陽は敬ふべく、怖るべきものであり、月は愛すべく、親むべきものである。星は何すべきものであるか？ 恐るべきものでは全くない、愛らしいとは言へるであらうが、月ほどではない。拜むに適するから、やはり敬すべきものであらう。宵の明星、曉の明星などは殊にさうである。併し、獨逸語では、月は男性であり、太陽は却つて女性だから、冬に太陽が照つて、暖かさを送ってくれるのは、母の愛に等しいであらう。女性と感ずるのも無理はな

い。我國の様な亞熱帶や、熱帶地方の國々の、夏の烈々たる太陽の恐るべきと、同様に考へてはならぬ。月は、我が國などでこそ、女性と見らるべきだが、冬の寒空に、獨逸などで、月を仰いだら、全く凄い感じである。特に弦月が凄い。三日月は鎌のやうだといへやう。男性にされても仕方がない。

秋の夜の空を仰いでみると、私は天文學者や數學者は偉いと思ふ。あれを一々觀測して、質量を計つたり、距離を計算したり、光線を分析したり、寫眞に取つたり、全く人間わざではないやうな事をやる。第一、曆を作るのからが大變な事であるが、彗星の軌道を知つて、其の出現を豫言したりするに至つては、未開人が魔法使ひだと思ふのも、當然である。望遠鏡で見得ない前に、寫眞にも撮り得ない前に、計算と推理とで、海王星の存在を確定した人達は偉い。

けれども、又、天文學者と稱せられる人の中にも、ひどいのがある。もうよほど前の事だが、ちやうど火星が地球は近づいて來て、火星の事が種々新聞や雑誌に書かれた際、或る天文學者は、“今、火星は秋の最中である。例の運河の縁には木々が紅葉して眞紅である。望遠鏡に紅く映つて見えてゐる”と書いたものだ。私は讀みもて行く内に、此處に至つて、其の雑誌だつたか、書物だつたかを抛りつけてしまった。人を馬鹿にするにも程がある。講談師ならいさ知らず、苟も學者と名のつく者が!!とひどく憤慨したものだ。さすがに、昨年は、そんなのは出て來なかつた。

私の住んでゐる所は田舎びた所で、人家もまだ少くて、廣々としてゐるから、月を見るにも、星を仰ぐにも、まことに適した所である。生れ故郷は附近で一番高い山里で、何れへ向つても水源地だから、夏から秋へかけての夜の空は特に美しく見られる。子供の時分から庭へ置座をして、寝そべつて夜を眺めることが好きであつた。今でも、夏の宵には、よく之をやつてゐる。秋の夜の散歩も好きである。月や星は幼い時分からのお友達のやうな氣がする。格別天文學者にならうとは思はなかつたが、たゞ平凡に之を眺めて、空想に耽るのが好きなのである。

會員各位より“天界”の原稿を歓迎す

投稿規定は

1. ひだり横書きとすること。
2. 本誌1ページは、35字づめ、35行であるから、適當なる原稿用紙を用ひ、なるべく編輯に便利なるやうに、書くこと。
3. 別刷を入用とする人は、あらかじめ其の部數を、編輯係に申し込むこと。但し、之れは、實費を本會會計へ申し受けます。
4. 原稿ノ切は毎月末。
5. 本誌の編輯事務所は、京都市上京區平野宮北町52 山本一清方。